

特別支援学校（知的障害）小学部における食育の研究 —学級担任と栄養教諭の連携した食に関する指導—

佐藤 友里

I 問題

食生活の乱れや肥満傾向等の食に関する問題が多くみられる。このような状況から、食に対する取り組みが見直され始めた。そして、子どもたちが豊かな人間性を育み生きる力を身に付けていくためには、「食」が重要であり、食育を生きる上での基本であって知育、徳育及び体育の基礎となるべきものと位置付け、様々な経験を通じて「食」に関する知識と「食」を選択する力を習得し、健全な食生活を実践することができる人間を育てるため、食育を推進することが求められている（内閣府，2009）。2006年には食育推進基本計画が決定され、子どもの健全な食生活の実現と豊かな人間形成を図るため、学校において食育を推進することが明記された（内閣府，2009）。

学校の食育を推進するキーパーソンとして、2005年度から栄養教諭が配置された。栄養教諭は教師としての資質と栄養学等の専門的な知識や経験を持っており、その専門性を調理活動や給食指導で生かすことが期待されている。

知的障害児には、過栄養や低栄養、軟食、偏食、早食い、丸呑み、だらだら食いなど特有の食の問題がみられ（大和田，2009）、肥満傾向である児童も多い（国立特別支援教育総合研究所，2007；文部科学省，2014）。これら食の課題を改善し、将来自立し社会参加するための基盤として望ましい食習慣や健康を管理する力、判断する力などを身に付けるために、児童生徒の発達段階を考慮しながら、学校の教育活動全体を通じて食に関する指導を行っていくことが求められている（文部科学省，2009）。

井奥・中村・白石・小切間（2014）が小学校教員、栄養教諭及び養護教諭に行った食育調査によ

ると、最も食育が実践されている教科等は家庭科であり、次いで、給食、総合的な学習の時間、生活科の順に多いという結果になっている。特別支援学校（知的障害）小学部には、家庭科及び総合的な学習の時間は教育課程に位置づけられていないが、食の分野として調理活動が生活単元学習等において多く実践されている。そこで、本研究においては、食育として実践する機会が多い調理活動と給食の時間における指導に研究の焦点を当てることとした。

大隅（2012）は、栄養教諭単独での授業は難しく、他教員との連携が重要であると述べている。特別支援学校においては、学校全体の食育を担う栄養教諭と、児童一人ひとりの状態を適切に把握し日々指導を行っている学級担任が互いの専門性を生かし合い連携していくことで、より充実した食に関する指導を行うことができると予測される。

小学部段階は適切な食習慣を身につけていく重要な時期であり（文部科学省，2010）、成長期で心身の成長も著しいため指導の効果は大きい。したがって、児童の食に関する課題を改善し、生きる力を育むために、学級担任と栄養教諭の連携した食に関する指導の在り方を具体的に調査し、検討することは大変意義のあることである。

II 目的

特別支援学校（知的障害）小学部における食に関する児童の実態や実践内容等について明らかにし、学級担任と栄養教諭が連携して調理活動及び給食指導を行うための効果的な手立てについて検討することを目的とする。

III 方法

1 研究1（質問紙調査）

国立大学附属特別支援学校（知的障害）小学部

に勤務する学部主事、学級担任及び栄養教諭に対し、郵送による質問紙調査を実施した。

調査内容は、①学校における食育の特徴、②食に関する児童の実態と食に関する指導の内容、③調理活動及び給食指導の内容、④学級担任と栄養教諭の連携した食に関する指導の内容、⑤食育及び食に関する指導のとらえ方である。

2 研究2（面接調査）

国立大学附属特別支援学校（知的障害）小学部に勤務する教師5名及び栄養教諭2名に対して、半構造化面接を実施した。

調査内容は、学級担任と栄養教諭の連携した調理活動及び給食指導の実践事例、連携の工夫等である。

なお、本研究は上越教育大学研究倫理審査委員会の承認を受け実施した（26-61）。

IV 結果

1 研究1（質問紙調査）の結果

1) 回収状況

全国の国立大学附属特別支援学校41校に調査用紙を送付し、27校（小学部主事27名、学級担任79名、栄養教諭12名）から回答を得た。回収率は、65.9%であった。

2) 食に課題のある児童に対する食に関する指導

学級担任に、どのような児童に対して食に関する指導をしたことがあるかについて尋ねた。偏食の児童に対する指導が51.9%と最も多く、次いで肥満傾向の児童に対する指導が30.4%、早食いの児童に対する指導が25.3%であった（表1）。

3) 調理活動における栄養教諭との連携機会

学級担任に、調理活動を行う際、栄養教諭と連携する機会はどれくらいか回答を求めた。連携なしが75.0%と最も多く、次いで年数回が16.7%、月1回が2.8%という結果であった（表2）。

4) 給食指導における栄養教諭との連携機会

学級担任に、給食指導を行う際に栄養教諭と連携する機会がどの程度かについて回答を求めた。年に数回が31.6%で最も多く、次いで連携なしが27.8%、月に1回が11.4%であった（表3）。その他には、「ほぼ毎日」等の内容があげられた。

表1 食に課題のある児童に対する食に関する指導

項目	人数	%
偏食の児童	41	51.9
肥満傾向の児童	24	30.4
早食いの児童	20	25.3
食に敏感な児童	17	21.5
刻み食が必要な児童	16	20.3
アレルギーのある児童	13	16.4
丸呑みをする児童	10	12.7
少食の児童	6	7.6
過食の児童	3	3.8
痩身傾向の児童	0	0
その他	3	3.8
無記入	15	19

（複数回答 n=79）

表2 調理活動での栄養教諭との連携機会

項目	人数	%
連携あり	18	25.0
（内訳）年数回	10	13.9
月1回	2	2.8
週1回	0	0.0
その他	5	6.9
連携なし	54	75.0

（n=72）

表3 給食指導での栄養教諭との連携機会

項目	人数	%
連携あり	55	69.6
（内訳）年数回	25	31.6
月1回	9	11.4
週1回	3	3.8
その他	18	22.8
連携なし	22	27.8
無記入	2	2.5

（n=79）

2 研究2（面接調査）の結果

1) 知的障害児に対する食に関する指導

偏食や肥満傾向といった食に関する課題のある児童が多い要因について、実生活に結びつけることの難しさや感覚過敏、こだわり等の知的障害や自閉症の特性が関係していると教師はとらえていた。また、保護者とどのようなやりとりをしてきたかという食経験も大きく影響していた。

食育の定義にある食に関する知識と選択する力を習得し、健全な食生活を実践することができる人間とは、人と食を楽しむことのできる姿をイメ

ーじして教師は指導にあたっていた。そのため、小学部段階では、児童の障害の特性や実態をふまえ、児童が適切な食習慣を身につけられるよう、体験的な活動を取り入れ、具体的に、また繰り返し指導していくことが重要であると語られた。

2) 調理活動と給食指導における連携

調理活動は、児童の実態をふまえて比較的簡単な活動を学級担任同士で設定しているため、栄養教諭との連携の必要性を特に感じていないことが教師から述べられた。中心的な役割として指導することよりも、メニューや工程のアドバイスをしたり、様子を見てもらったりといった連携を学級担任は望んでいた。

一方、給食指導においては、給食時間の巡回で児童の様子を見てもらったり、実際に声かけをしてもらったり、献立の料理や食材の由来や食文化について教えてもらったり等、様々な面で学級担任と栄養教諭が連携していた。

3) 学級担任と栄養教諭が連携するための工夫

学級担任と栄養教諭は、給食に関するアンケートで毎日やりとりをしたり、給食巡回や放課後に疑問に思ったことや伝えたいことを話し合ったり、日常的なやりとりを通して情報交換を行っていた。栄養教諭の席が職員室にあったり、小学部の近くにあってすることで学級担任も栄養教諭も、お互いの職務について理解し、話しやすい関係が作られていた。

V 考察

1 知的障害児の食に関する特徴

偏食や食に敏感、肥満傾向である児童が多く在籍していた。その要因には、大和田（2009）や田部・高橋（2014）が指摘するように、感覚過敏やこだわり、実生活に結びつけることの難しさなどの自閉症や知的障害の特性から、偏食や肥満、早食い等になりやすい傾向にあることが明らかとなった。また、食環境も大きく関係していた。児童が家庭でどのような味を経験してきたか、保護者がどのような対応をしてきたかといった家庭での生活スタイルが、児童の食習慣に影響を及ぼしている。食べられる物が限られたり、偏った食事で

肥満傾向になったりすることも考えられる。

2 調理活動での学級担任と栄養教諭の連携

調理活動の指導において、栄養教諭と連携したことの学級担任は25.0%で、栄養教諭がメニューや作り方のアドバイスをする、授業者として活動にかかわるといった連携がみられた。連携の頻度が低い理由には、調理活動は児童が安全にかつ楽しくできるように比較的簡単な活動がなされていることが大きい。また、学級担任同士で話し合い計画するため、栄養教諭からもアプローチがしにくいという面もあると思われる。そのため、栄養教諭が連携する機会は少なくなっている。しかしながら、メニューや調理の工程等を決めたり、衛生面の意識づけを行ったりすることに難しさを感じている学級担任も多い。そこで、栄養学等の専門家である栄養教諭がメニューのアイデアや衛生面の注意事項をアドバイスしたり、調理活動の様子を見に行っただけで済んだりすることで、学級担任は新たなアイデアを得られ指導の幅が広がり、児童にとっては新鮮な気持ちで授業に取り組めることが期待できる。連携していくことで、より充実した調理活動の指導ができると推察された。

3 給食指導での学級担任と栄養教諭の連携

給食指導で栄養教諭と連携したことの学級担任は69.6%で、献立に関することや給食時間の巡回といった連携が多く挙げられていた。給食は毎日あり、児童が実際に食べる場面であることから児童の食に関する課題が見えやすい時間といえるため、連携の必要性を感じている学級担任が多いと考えられる。

また、献立は栄養教諭が作成しており、給食時間に児童の様子を見て関わったり、学級担任と話し合ったりすることで、児童の実態把握が深まり、信頼関係も築かれる。すると、児童の実態をふまえて給食献立を工夫したり食に関する指導を行ったりできるので、栄養教諭も学級担任との連携頻度が多くなると推察される。

4 連携するための効果的な手立て

学級担任と栄養教諭が連携するには、日常的に

情報交換をして共通理解を図っていくことが重要であり、そのためにはお互いの関係性ができていないと難しい。栄養教諭の席が小学部の職員室にあったり、小学部の近くにあったりすることで、必要なときに会って話すことができ、連携がしやすい。また、食に関することや児童のこと以外等の気軽に話せる距離感であり、お互いの職務について理解を深め、気軽に話し合える関係であることが、日常的なやりとりのしやすさにつながっていると考えられる。

さらに、栄養教諭が献立の工夫をしたり、巡回をしたり等、積極的に食育の取組を行い、アナウンスしていくことで、学級担任や児童、保護者の食に関する関心を高めたり、新たなアイデアを発信することができ、学級担任も食に関心をもって様々な食に関する指導を行い、気付いたことや希望があれば進んで栄養教諭にアプローチしていくことで、栄養教諭もかかわりやすくなる。両者が食に関心を持ち、互いにアプローチしあっていくことが連携を効果的に進めていた。

VI 結論

調理活動は学級担任同士が年間の学習の流れをふまえて実施しているために栄養教諭と連携したことの教師は少ないが、給食指導では連携する機会が多かった。給食は毎日あり、栄養教諭が実際に子どもの様子を見たり関わったり、児童の実態を担当が伝えたりすることで、栄養教諭は献立に反映したり、偏食指導の仕方や食器の使い方等について実態をふまえたアドバイスをしたりすることができ、学級担任も日々の指導に活かすやすくなるため連携の必要が高いからである。

学級担任と栄養教諭が連携していくための工夫として、職員室内に栄養教諭の席を置いたり様々な場面で児童にかかわったり、アンケートや給食巡回を実施したりすることで、日常的に話し合い情報共有することが重要であった。また、栄養教諭が給食管理と食に関する指導の一体化により児童の実態をふまえた献立の工夫や様々な食育の取組を提案し、便りやホームページ等でアナウンスしていくことや学級担任が栄養教諭に気になる

ことや聞きたいことがあったら聞きに行く等、積極的に両者が歩み寄っていくことで、学級担任も栄養教諭も新たなアイデアを得たり、児童の実態を把握し指導に活かしたりことができ、より幅広い指導の展開につながる事が明らかとなった。

学級担任は食に関心を持ち、日々給食の時間や調理活動をはじめ、学校の教育活動全体を通して食に関する指導を行っている。だからこそ、栄養教諭が連携し栄養学等の深い知識をアドバイスしたりかかわったり、学級担任が児童の実態等について伝えたりしていき、それぞれの持ち味を生かしあう連携（飯田，2005）によって、より充実した食に関する指導を行うことができる。

文献

- 飯田範子（2005）家庭科からひろがる食の学び．日本家庭科教育学会（編）．ドメス出版．
- 井奥加奈・中村友栄・白石龍生・小切間美保（2014）2009年と2013年の食育調査に見る小学校に勤務する教員の役割分担意識と子供の食生活における問題意識の変化．大阪教育大学紀要，63，5-16．
- 国立特殊教育総合研究所（2007）Ⅱ 知的障害のある子どもの健康問題に関する調査報告，慢性疾患児（心身症や不登校を含む）の自己管理支援のための教育的対応に関する研究．国立特別支援教育総合研究所，2007年3月，
http://www.nise.go.jp/kenshuka/josa/kankobutsu/pub_b/b-214/b-214_all.pdf（2015年12月19日）
- 文部科学省（2004）食に関する指導体制の整備について（答申）．中央教育審議会，2004年1月20日，
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/04011502.htm（2015年12月19日）
- 文部科学省（2009）特別支援学校学習指導要領解説総則等編（幼稚園・小学部・中学部），教育出版．
- 文部科学省（2010）食に関する指導の手引—第一次改訂版—．東山書房．
- 文部科学省（2014）平成25年度学校保健統計調査（確定値）の公表について．文部科学省，2014年3月28日，
http://www.mext.go.jp/component/b_menu/other/_icsFiles/fieldfile/2014/03/28/1345147_1.pdf（2015年12月19日）
- 内閣府（2009）食育基本法．内閣府，2009年6月5日，
<http://www8.cao.go.jp/syokuiku/about/law/law.html>（2015年12月19日）
- 大隅順子（2012）特別支援学校における「食育」の実践と課題—家庭科教員から見た栄養教諭への期待—．同志社女子大学生活科学，46，82-85．
- 大和田浩子（2009）知的・身体障害者のための栄養ケア・マネジメントマニュアル．建帛社．
- 田部絢子・高橋智（2014）発達障害児における【食の困難・ニーズ】の実態と支援に関する研究．日本教育学会大会研究発表要項，73，280-281．